

# 『躬恒集』注釈（十一）

平沢竜介・玉木紗也香・西村瑠美子・  
福地治子・渡邊範子・渡辺優子

709 おしなべて<sup>を</sup>天<sup>あめ</sup>の下にもちはやぶる<sup>ち</sup>神路<sup>かみち</sup>の山の神は守る<sup>も</sup>らし

## 【他出文献】

題不知

凡河内躬恒

おしなべてあめのしたにもちはやぶる神ちの山の神はくもらじ

（続古今和歌集・卷七・神祇歌・六九四）

## 【語釈】

○おしなべて―すべて。一様に。あまねく。○天の下―日本国中。日本の国土。○ちはやぶる―「神路の山」を導く枕詞。○神路の山―神路山。伊勢国の歌枕で伊勢神宮の南西の御山の総称。別名「宇治山」「天照山」「鷲日山」「太山」。○守るらし―守っているらしい。守っているに違いない。

## 【通釈】

あまねく日本の国を、神路山の神は守っているに違いない。

## 【類歌・参考】

高野山をすみうかれてのち、伊勢国ふたみのうらの山でらに侍りけるに、大神宮の御山をば神ぢ山と申す、

大日如来御垂跡をおもひてよみ侍りける

円位法師

ふかくいりて神ぢのおくをたづぬれば又うへもなきみねの松かぜ (千載和歌集・卷二十・神祇歌・一二七八)

太神宮のうたの中に

太上天皇

ながめばや神ぢの山に雲さえてゆふべの空を出でむ月かけ (新古今和歌集・卷十九・神祇歌・一八七五)

(題しらず)

(西行法師)

神ぢ山月さやかなるちかひありてあめのしたをばてらすなりけり (新古今和歌集・卷十九・神祇歌・一八七八)

神祇歌の中に

僧正行意

すずかがはふりさけ見れば神ぢ山さかきばわけていづる月かけ (続後撰和歌集・卷九・神祇歌・五四一)

題不知

710 遠山田守るや人目のしげ、れば穂にこそ出ね忘やはする

【他出文献】

題不知

躬恒

とほやまだもるや人めのしげければほにこそいでねわすれやはする

(続古今和歌集・卷十一・恋一・九八六)

【語釈】

○遠山田―人里を遠く離れた山中にある田。ここでは「守る」を導く枕詞。○守る―守る。番をする。○穂

にこそ出ね―底本は「ほにこそ出め」とあり、「め」がミセケチで「ね」とされている。「穂に出づ」は、「表面に出す」「はつきりと表す」の意。「穂」は「遠山田」と縁語。

【通釈】

題しらず

遠山田の番をするように、あなたを守る人目が多いので、はつきりと気持ちを表すことはありませんが、あなたを忘れることがありますか。

## 【類歌・参考】

(題しらず)

をののはるかぜ

花すすきほにいでてこひば名ををしみしたゆふひものむすぼほれつつ (古今和歌集・卷十三・恋三・六五三)

題しらず

藤原なかひらの朝臣

花すすき我こそしたに思ひしかほにいでて人にむすばれにけり (古今和歌集・卷十五・恋五・七四八)

まだ年わかかりける女につかはしける

源中正

葉をわかみほにこそいでね花すすきしたの心にむすばざらめや (後撰和歌集・卷十・恋二・六〇四)

よみ人しらず

花すすきほにいづる事もなきものをまだき吹きぬる秋の風かな (後撰和歌集・卷十二・恋四・八四〇)

是貞親王家哥合に

711 宵くくに秋の草葉に置露は玉にぬかんととれば消つ、

## 【他出文献】

是貞親王家歌合に

躬恒

よひよひに秋の草葉におく露は玉にぬかんととれば消えつつ (新千載和歌集・卷四・秋上・三一六)

宵宵に秋の草葉におく露の玉にぬかむととれば消えつつ

(寛平五年九月以前秋是貞親王歌合・一〇)

【語釈】

○是貞親王家歌合―是貞親王主催により、寛平五年(八九三)九月以前の秋成立。三十五番七十一首の秋歌を収録しているが、一番左の忠岑以外は作者名も勝負の記載もない。○つつ―詠嘆の意を表す。

【通釈】

是貞親王の家の歌合に

毎晩秋の草の葉に置く露は玉につらぬこうと手に取れば消えることよ。

【類歌・参考】

(題しらず)

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

(よみ人しらず)

(古今和歌集・卷四・秋上・二二二)

是貞のみこの家の歌合によめる

文屋あさやす

秋ののにおくしらつつゆは玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

(古今和歌集・卷四・秋上・二二五)

御返し

伊勢

うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてやつゆもおくらん

(後撰和歌集・卷六・秋中・二八〇)

左大将済時、白河にて説経せさせ侍りけるに

実方朝臣

けふよりは露のいのちもをしからず蓮のうへのたまとちぎれば

(拾遺和歌集・卷二十・哀傷・一三四〇)

燈懸水澄明

712 みなそこの影もつかばかり火のあまたに見ゆる春の夜半哉

【他出文献】

燈懸水澄明

凡河内躬恒

みなそこのかけもつかばかり火のあまたにみゆる春のよひかな

(新拾遺和歌集・卷二・春下・一七二)

【語釈】

○影―姿。形。 ○夜半―夜。夜中。

【通釈】

燈懸水澄明

水の底に映っている篝火の姿も浮かんでいるので、篝火が沢山に見える春の夜であることよ。

【類歌・参考】

(題しらず)

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ

(古今和歌集・卷十一・恋一・五二九)

(題しらず)

かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり

(古今和歌集・卷十一・恋一・五三〇)

女につかはしける

(よみ人しらず)

かがり火にあらぬおもひのいかなれば涙の河にうきてもゆらん

(後撰和歌集・卷十二・恋四・八六九)

六月うかひ

篝火のかけしるければうは玉のよかはのそこは水も、えけり

(貫之集I・一〇)

713

秋風とに山と飛び越こえて来る雁の羽は向けむに消きゆる嶺の白雲

題しらず

【他出文献】

題しらず

秋風に山とびこえてくる雁のはむけにきゆる嶺の白雲

躬恒

(新拾遺和歌集・卷五・秋下・五〇三)

秋歌中 古来歌合

躬恒

秋風に山とびこえてくるかりのさむげにきゆる峰のしら雲

(夫木和歌抄・卷十二・秋三・四八八三)

【語釈】

○羽向け―鳥が羽をその方へ向けること。また、羽を向ける方向。

【通釈】

題しらず

秋風とともに山を飛び越えて来る雁の羽向けで消える嶺の白雲よ

【類歌・参考】

秋風に山とびこゆるはつ雁のつばさにわくるみねの白雲

(金槐和歌集・二二三二)

或る人の家にて、帰雁をよめる

春くれば霞を分けて飛雁の越路のかたへ羽むけする也

(基佐集・二二二)



題しらず

714 朝あさなく梳けずればいと乱みだれつ、我黒髪との解とけぬ比哉

【他出文献】

(題しらず)

躬恒

朝な朝なげづればいとみだれつつ我がくろかみのとけぬ比かな (新拾遺和歌集・卷十三・恋三・一二〇五)

【語釈】

○朝な朝な―毎朝。朝ごとに。 ○乱れつつ―「髪が乱れる」の意の「乱れ」と、「心が乱れる」の意の「乱れ」を掛ける。 ○解けぬ―「髪が解ける」の意の「解け」に、「心が晴れる」の意の「解け」を掛ける。

【通釈】

題しらず

毎朝毎朝梳かすと大層乱れて私の黒髪が解けないように、大層心が乱れて晴れることのない頃であることよ。

【類歌・参考】

(題しらず)

和泉式部

くろかみのみだれもしらずうちふせばまつかきやりし人ぞこひしき (後拾遺和歌集・卷十三・恋三・七五五)

(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる) 待賢門院堀川

ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ (千載和歌集・卷十三・恋三・八〇二)

(恋歌中に) 権中納言経高母

思ひやれひとりかきやるくろかみのとけてねられぬさよの手枕 (新葉和歌集・卷十二・恋二・七三七)

### 古今集(元永本)による補遺

715 照る月を弓張りとしもいふことは山の端さしていればなりけり (他に志香須賀本・基俊本に載る)

#### 【語釈】

○弓張りとしも―基俊本では「ゆみはりとのみ」。○山の端―志香須賀本・基俊本では「やまへを」「山辺を」。

○弓張り―弓を張ること。弓張り月の略。○いれば―「いれ」に「入れ」と「射れ」を掛ける。

#### 【通釈】

照る月を弓張りというのは、月が山の端に向かって入る(射る)からである。

【類歌・参考】

(旋頭歌)

源かげあきら

あづさゆみおもはずにしていりにしをさもねたくひきとどめてぞふすべかりける

(拾遺和歌集・卷九・雜下・五六八)

きさらぎのころほひはなみに俊綱朝臣のふしみのいへに人人まかれりけるにたれともしられでさしおかせは  
べりける  
皇后宮美作

うらやましいるみともがなあづさゆみふしみのさとのはなのまとるに  
(後拾遺和歌集・卷一・春上・七九)

後撰集(歴博高松宮蔵・飛鳥井雅有奥書本)による補遺

716 和泉の国にまかり侍ける時、海の邊にて  
春深き色にもあるかな住の江のそこも緑に見ゆる浜松

【語釈】

○住の江―摂津国の歌枕。大阪府(摂津国)大阪市住吉の津(入江)、あるいは住吉神社辺の地域。松が詠み込

まれることが多い。○深き―春深きの「深き」と松の緑の色の「深き」を掛ける。

【通釈】

和泉の国に行つた時に海岸で

春が深く深い色であることだなあ。住の江の水底にも緑に見える浜松は。

【類歌・参考】

よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる づらゆき

吉野河岸の山吹ふくかぜにその影さへうつるひにけり (古今和歌集・卷二・春下・一二四)

おほさはの池のかたにきくうゑたるをよめる ともものり

ひともと思ひしきくをおほさはの池のそこにもたれかうゑけむ (古今和歌集・卷五・秋下・二七五)

秋 (そせい法し)

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白波 (古今和歌集・卷七・賀・三六〇)

(題しらず) (よみ人しらず)

ひさしくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける (古今和歌集・卷十五・恋五・七七八)

古今和歌六帖（永青文庫本）による補遺

717 待つ人も来ぬものゆゑに鶯の鳴きつる枝を折りてけるかな

【他出文献】

（題しらず）

（よみ人しらず）

まつ人もこぬものゆゑにうぐひすのなきつる花ををりてけるかな

（古今和歌集・卷二・春下・一〇〇）

まつ人はこぬものゆゑにうぐひすの鳴きつるえだををりてけるかな

（古今和歌六帖・卷六・四三九二）

【語釈】

○来ぬものゆゑに―底本「こぬものからに」。底本傍書によって校訂する。○枝―底本傍書「花」。

【通釈】

待っている人も来ないので、鶯の鳴いている枝を折ってしまったことだなあ。

【類歌・参考】

雪の木にふりかかれるをよめる

素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく

(古今和歌集・卷一・春上・六)

(つねにまうできかよひける所に、さはる事侍りてひさしくまできあはずして年かへりにけり、あくるはる

やよひのつごもりにつかはしける)

(藤原雅正)

ともにこそ花をも見めとまつ人のこぬものゆゑにをしきはるかな

(後撰和歌集・卷三・春下・一三八)

(恋歌とて)

今上御製

わが思ひなくさまなくなにしかもこぬものゆゑにたのめおきけん

(玉葉和歌集・卷十・恋二・一四一〇)

718

今日よりは今来ん年の昨日をぞいつしかとのみ待ち渡るべき

【他出文献】

やうかの日よめる

みぶのただみね

けふよりはいまこむ年のきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき

(古今和歌集・卷四・秋上・一八三)

七月八日

けふよりはいまこんとしのきのふをぞいつしかとのみまちわたるへき

(忠岑集Ⅳ・二)

【語釈】

○今来ん―やがてやって来る。またやって来る。 ○昨日―七月七日、七夕の日。 ○いつしか―早く早くと。

【通釈】

今日からはまたやって来る年の昨日、すなわち来年の七月七日を早く来ないかとずっと待ち続けるのだろうか。

【類歌・参考】

(題しらず)

内大臣

たなばたのあかぬ別のかへるさに今こんとしを又ちぎるらむ

(新拾遺和歌集・卷四・秋上・三四四)

(題しらず)

柿本人麿

あふことをいつしかとのみまつしまのかはらず人をこひわたるかな

(続古今和歌集・卷十二・恋二・一一〇六)

(題しらず)

躬恒

逢う事をいつしかとのみ松風のおとにしられて恋ひわたるかな

(新千載和歌集・卷十二・恋二・一二三四)

こゝに又我が飽かぬ月を山の端のをちの里には遅しとや待つ

【他出文献】

或本みつね

ここに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはおそしとやまつ

(古今和歌六帖・卷一・一七四)

【語釈】

○又―やはり。 ○をちの里―あちらの里。

【通釈】

ここでもやはり私が見飽きない月を、山の端のあちらの里では月の出るのが遅いと待っているのだろうか。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

おそくいづる月にもあるかな葦引の山のあなたをしむべらなり

(古今和歌集・卷十七・雑上・八七七)

題不知

永源法師

身をつめばいるをしまじ秋の月山のあなたのひとまつらん

(後拾遺和歌集・卷四・秋上・二五四)

┌



720 紅葉もみぢばの流ながれてよどむ水門みなどをぞ暮くれゆく秋あきのとまりとは見みよ

【語釈】

○水門―河口。川や海などの水の出入り口。 ○とまり―最後に落ち着く所。終わり。果て。船の停泊する所。  
「水門」と縁語。

【通釈】

紅葉の葉が流れて淀んでいる河口を、暮れていく秋の終着点だと見なさい。

【類歌・参考】

もみぢながれたるかたをかけりけるを題にてよめる そせい

もみぢばのながれてとまるみなどには紅葉き浪や立つらむ (古今和歌集・卷五・秋下・二九三)

秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる つらゆき

年ごとにもみぢばながす竜田河みなどや秋のとまりなるらむ (古今和歌集・卷五・秋下・三一)

五十首歌たてまつりし時 寂蓮法師

くれて行く春のみなどはしらねども霞におつる宇治のしばぶね (新古今和歌集・卷二・春下・一六九)

川にもみちなかる、を見たる所

もみち葉のなかる、時は竜田河みなどよりこそ秋はゆくらめ

(貫之集I・二三八)

721

千鳥鳴く佐保の川霧たちかへりつれなき人を恋ひわたるかな

【語釈】

○佐保の川霧―初句からここまでが「たちかへり」を導く序詞。「佐保川」は大和国の歌枕。奈良市、春日山の東側に発し、若草山北方を西流、さらに南流し、水谷川、率川、岩井川を合わせて大川（大和川の上流）となる川。千鳥、蛍の名所。○たちかへり―「川霧がたつ」の「立つ」と「くり返す」の意の「たちかへり」を掛ける。

【通釈】

(千鳥が鳴く佐保の川霧がたつ) くり返し冷淡な人をずっと恋しく思うことだ。

【類歌・参考】

(秋)

(そせい法し)

千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく

(古今和歌集・卷七・賀歌・三六一)

ただみね

ちどり鳴くさほのかはぎり立ちぬらしまきのこずゑも色づきにけり

(古今和歌六帖・卷六・四二八五)

さほやま、長谷寺にまうてて

千鳥なくさほの川霧さほ山のみちはかりは立なかくしそ

(順集Ⅱ・一六五)

ふくにおはしけるに、内よりまとをなりける御かへりに、日ころおはしあつめたりけるを、御てならひのやうにてたてまつらせたまひける

たちくもるさほのかはきりはれすのみひたけぬそらにほとふるかな

(齋宮女御集Ⅱ・一八)

722

信楽しがらきの岑みねた立ちかくす春霞がすみはれ晴れずも物ものを思おもふころかな

【語釈】

○信楽―近江国の歌枕。現在の滋賀県甲賀郡信楽町をいう。古くは奈良朝（聖武天皇）の紫香樂宮で知られていた。信楽が和歌によく詠まれるようになったのは、平安時代以降である。○立ちかくす―立ちはだかつてさえ

ぎり隠す。○春霞―ここまでが「晴れず」を導く序詞。○晴れずも―「見晴らしがきく」の意の「はれ」と

「心が晴々する」の意の「はれ」が掛けられている。

## 【通釈】

信楽の岑をさえぎり隠す春霞のように、心が晴れることなく物思いをする頃であることよ。

## 【類歌・参考】

百首歌中に雪をよめる

隆源法師

みやこだに雪ふりぬればしがらきのまきのそま山あたたえぬらん  
（金葉和歌集二度本・巻四・冬・二九二）

寛和二年内裏歌合に霞をよめる

藤原惟成

きのうかもあられふりしはしがらきのとやまのかすみ春めきにけり  
（詞花和歌集・巻一・春・二）

しのびてもの申し侍りける女の、春のころとほくわかれけるにいひつかはしける

前中納言定家

今日やさはへだてはてつるはるがすみはれぬおもひはいつとわかねど  
（続古今和歌集・巻九・離別・八五六）

霞をよめる

人丸

まきもくのひばらにたてる春がすみはれぬおもひはなぐさまるやは  
（続古今和歌集・巻十七・雑上・一四八八）

白浪しらなみの打うてども立たたず群むれゐつゝ人にとほかも目め馴なれたる鳥とり

【語釈】

○立たず―飛び立たないで。 ○とほかも―この部分、意味未詳。 ○目馴れたる―見慣れた。

【通釈】

白浪が打ち寄せても飛び立たないで群れていて、人に（ ）見馴れた鳥。

【類歌・参考】

返し

(よみ人しらず)

ほのみてもめなれにけりときくからにふしかへりこそしなまほしけれ (後撰和歌集・卷十二・恋四・八五七)

(はる)

むめのはないろはめなれてふくかせにほひくるかそとこめつらなる (躬恒集Ⅳ・二二八)

724 荒磯<sup>ありそうみ</sup>海のうらめしくこそ思<sup>おも</sup>ほゆれ<sup>かたかひ</sup>片貝をのみ人の拾<sup>ひろ</sup>へば

【語釈】

○荒磯海のうらめしくこそ―「荒磯海」は「荒い磯の海辺」。「うらめし」に「浦」と「恨めし」の「うら」をか

ける。○片貝―「二枚貝の片方だけの貝殻」の意か。

【通釈】

荒い磯の海辺はうらめしく思われる。貝殻の片方だけを人が拾うので。

【類歌・参考】

題しらず

ひとしきこのみこ

我も思ふ人もわするなありそ海の浦吹く風のやむ時もなく

(後撰和歌集・卷十八・雑四・一二九八)

(題しらず)

(よみ人しらず)

ありそ海の浦とたのめしなごり浪うちよせてけるわすがひかな

(拾遺和歌集・卷十五・恋五・九七九)

(題しらず)

伊勢

わが恋はありそそのうみの風をいたみしきりによする浪のまもなし

(新古今和歌集・卷十一・恋一・一〇六四)

725

真澄鏡ますかぐみぬし主なき影かげは映うつるとも(人の心をいかが頼まむ)

【語釈】

○真澄鏡―よく澄んではっきり映る鏡。 ○主なき影―かつて恋人だった人の姿。

【通釈】

真澄鏡にかつての恋人の姿が映っても(恋人の心をどうして頼りに出来ようか)

【類歌・参考】

寄鏡恨恋

従三位光成

つらしとてくもりなはてそますかがみ我だに人のかけをわすれじ (統拾遺和歌集・卷十五・恋五・一〇六五)

寄鏡恋

源重泰

面影のかはるよりこそます鏡うつるころの程もみえけれ (統後拾遺和歌集・卷十四・恋四・九三〇)

弘長三年内裏百首歌奉りけるに、寄鏡恋 前大納言為氏

ます鏡おなじ影とはたのめどもかはる心のえやはみゆべき (統後拾遺和歌集・卷十四・恋四・九三四)

726 月影<sup>かげ</sup>を我が身<sup>み</sup>にかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

【他出文献】

(題しらず)

(ただみね)

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

(古今和歌集・卷十二・恋二・六〇二)

題しらず

ただみね

月かけをわが身にかふる物ならばおもはぬ人もあはれとや見む

(拾遺和歌集・卷十三・恋三・七九三)

月かけにわか身をかふるものならばおもはぬ人もあはれとや見ん

(忠岑集I・四一)

【語釈】

○月影―月の姿。

【通釈】

月を我が身にかえることができるならば、冷淡なあの人でも私を素晴らしいと見るだろうか。

【類歌・参考】

あひかたらひ侍りける人、みちのくにへまかりければ よしのぶ

いかで猶我が身にかへてたけくまの松ともならむ行人のため

(拾遺和歌集・卷八・雑上・四六〇)

君はなほよそにやきかむ月かけに我が身をかふるためしありとも

(壬二集・二八九二)



まことなきものと思ひせばいつはりに涙はかねて落とさざらまし

## 【他出文献】

みつねか

まことなき物と思ひせはいつはりの涙はかねておとさ、らまし

(貫之集 I・八〇四)

## 【語釈】

○いつはり―嘘。虚言。 ○かねて―これまでずっと。 ○落とさざらまし―底本は「おとらざらまし」。貫之集によつて校訂する。

## 【通釈】

真実がないものだとは分かつていたならば、あの人の偽りにこれまでずっと涙を流すことはなかったでしょう。

## 【類歌・参考】

寄夢恋

従三位為信

誠なき夢のただちの面影はたがいつはりにかよひそめけん

(新拾遺和歌集・卷十一・恋一・九九七)

(題しらず)

みつね

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ

(古今和歌集・卷十二・恋二・六一四)

(題しらず)

よみ人しらず

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

(古今和歌集・卷十四・恋四・七一二)